

24. 唐箕・千石通し

手回しの風車でもみと米とを風でより分ける唐箕。斜面をすべり降りる間に粒の小さな粉米はふるい分けるのが千石とおし。いずれも江戸時代以来の農具である。

トウミ（唐箕）

A は唐箕で本体幅 177cm、奥行 74cm、高さ 129cm。回転軸のある主柱に「河内国茨田郡木口」と補修材で後半は隠れているが製作者の墨書があり、「明治参拾参年 第拾月」（1900 年）は購入者の記入したもの。

4 本脚で主柱に回転軸が付き、落下量調節は前面操作で取出し口が 2 つとも前面に並ぶのは、小谷方明（1981）以来「京屋型唐箕」と呼ばれているタイプの典型である。

他に左右幅を 60cm も縮めた改良型も寄贈されている。

唐箕は中国起源

B は『天工開物』（1637）に見える中国の唐箕で「風扇車」と呼んでいる。中国では日本の弥生時代にあたる前漢時代に河南省の墓から、土間に作り付けた唐箕模型が出土している。元・明代のころ南中国では風車の両側を板ではさんだだけのタイプが使われているが、風車密閉の唐箕は『天工開物』が初見。この絵を見れば中国起源は一目瞭然。

江戸時代大坂で製作

日本では『会津農書』（1684）に「ぬかを取るに（中略）今とうみを仕ふはまれに有」と見えるのが最古の記録で、17 世紀後半から普及しはじめたらしい。

元禄時代（17 世紀末～18 世紀初）の大坂では、天神橋、天満橋、農人橋の辺りに農具商の店があって近郊農民の需要に応えていた。なかでも農人橋の京屋は明治・大正のころまで唐箕の主力メーカーとして続いていた。この京屋の弟子が独立して各地で地方メーカーとなった。A の唐箕も京屋で修行した職人の作であろう。

千石とおし

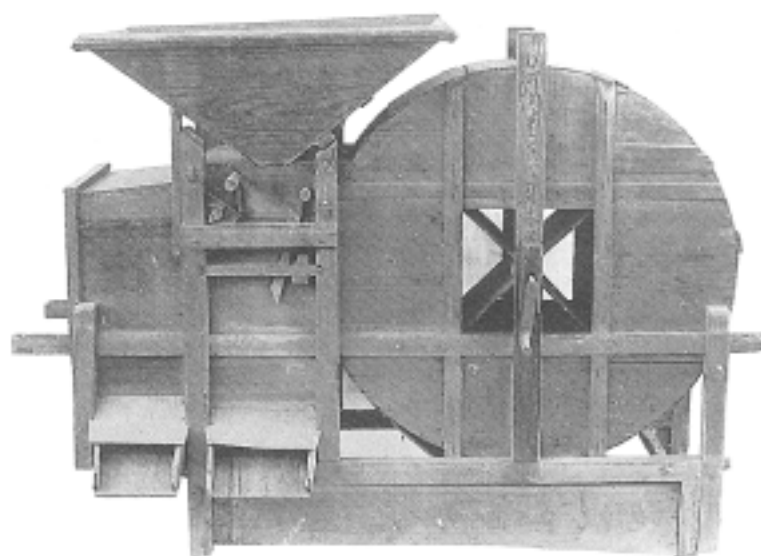
C はじょうごの取れた千石通し。「千石通し」という札が付けてあるが製作者の墨書は「万石」。千石通しと万石通しの区別は困難で、混同して使われてきたのが実情。

D は「摂津国各郡農具略図」の千石どおしで、こちらは漏斗も揃った完形品。

箱型の残る関東・東海地方

E は『和漢三才図会』（1712）に見える千斛通しで発明直後の箱型タイプ。上箱が漏斗で下箱に斜めに網が入っている。このタイプは東日本では長く残ったようで、静岡市の登呂博物館の図録には民具の箱型千石通しの写真が載せられている。

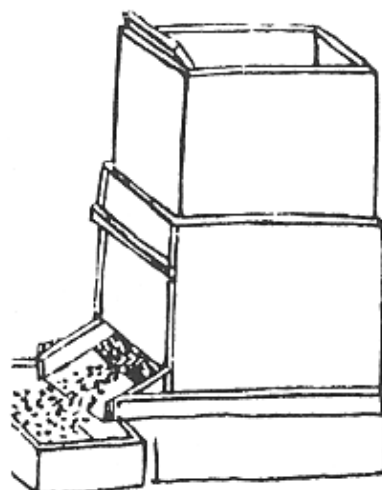
A



B



E



C



D

